

◆ 学士課程

《4月 1年次新設科目「地元論」開講》

【実績】

- ・平成 26 年度に平成 26 年度に文部科学省に科目新設を届け出た「地元論（看護学科 1 年次の選択科目）を平成 27 年 7 月～1 月までの通年科目として開講した。
- ・地元論の授業の目的を、“地元”の概要を理解し、学生個々人の“地元”に対する理解と愛着を深めることとし、科目の到達目標を、「“地元”という用語の概念について、自分の言葉で説明できる」、「“地元”で働くことの特徴（意義）を説明できる」などの 6 目標とした。科目担当の本学看護学科の教授の他、県内の小規模病院で働いている卒業生を非常勤講師とした。
- ・地元論における“地元”については、各人により“地元”の捉え方が違うことへの理解や、多様な価値観を認め合うことを重視した。

【成果】

- ・年度当初ガイダンス等で本プログラムの趣旨や概要を説明した結果、看護学科 1 年生 64 名中 61 名が履修登録をした（履修率；95.3%）。
- ・到達目標を達成するために、“地元”の用語の解説を講義形式で行ったほか、夏季休暇を利用して自分の“地元”の文化的背景の強み・弱みをまとめる課題学習、各自の“地元”を他者に紹介し、“地元”の理解を深めるグループワーク、“地元”で働くことを概観するグループワークなど、参加型の学習形式を多く取り入れ、学生自ら“地元”を認識理解できる教育内容と方法とした。その結果、学生の積極的な参加、活発な意見交換が行われた。
- ・評価の対象としたレポートには、「地元を改めて考え直すきっかけとなった」「地元で働きたい」といった記載が多くみられた。科目の到達目標は達成され授業目的に沿った成果が得られたと考える。
- ・平成 28 年度は、授業の目的を、“地元”の概要を理解し、学生個々人の“地元”に対する理解と愛着を深めることに加え、“地元”を創造する重要性についても教授する内容を計画している。また、平成 28 年度から新設される 2 年次科目（ジェネラリズム看護論、相互理解連携論）との教育内容の調整も行なう予定である。さらに、新設 3 科目の成果の測定方法についても検討を重ねていく。

【実施上のポイント】

- ・学生個々の考える「地元」を理解し、多様な価値観を認め合うことを重視する。
学生個々の持つ「地元」のイメージは、生まれ育ってきた場所が多く、その場所は多様な生活様式や文化背景を持っているため、自分の「地元」を振り返り見つめなおす機会とした。また、他人の「地元」に興味を持ち、知り、認めることは他の学生をも受容することにつながることを強調した。
- ・参加型の学習形式を多く取り入れ、学生自ら認識理解出来る教育内容にする。
「地元」に関する背景は、ことば、生活、文化、人と人のつながりなど幅広く、多様である。自分の「地元」を振り返るために、事前に課題を出し、講義のとき発表し合うなどの、学習形式をとった。
- ・卒業生や、実際に小規模病院等に勤務する看護職に、講義をしてもらう。
小規模病院等の看護職から、地元を選んだ理由や実際に活動しての思いなどについて講義をいただき、学生との意見交換などを通して身近なロールモデルを提示した。

《6月 総合看護学実習Ⅰにおいて、地元医療福祉の内容を強化した実習を試行実施する。》

【実績】

- ・4年次に開講している総合看護学実習Ⅰの在宅看護学領域の一部、成人看護慢性期領域で地元の医療福祉における看護を強化する内容の実習を実施した。
- ・在宅看護学領域では、県内北部の最上地方（山形市から約80km）にある町立病院を新規の実習施設とした。同町は高齢化率が33%を超え、町内の医療機関は町立病院のほか、1件の開業医院しかない地域である。同病院は往診や外来看護師による訪問看護を実施している。
- ・成人看護慢性期領域では、公立の総合病院のサテライト病院の2病院（山形市から約35～40km離れている）を新規の実習施設とした。どちらも置賜地方にあり、基幹病院である総合病院と機能分担を図りながら地域住民の身近な医療機関をめざしている小規模病院である。また、山形市内にあるA病院も新規の実習施設とした。A病院では医療依存度の高い高齢者の生活状況をとらえながら継続した看護を学ぶことを目的に専門外来での実習を行った。

【成果】

- ・在宅看護学領域の町立病院は、大学から遠方にあることや宿泊の関係から実家から通うことができる学生であることが条件となったため、実習学生は1人であった。当該学生は、町や最上地方における地域包括システム、高齢者の継続的ケアが抱える課題、それらのシステムや課題の中で小規模病院の看護師が果たす役割、地元住民からの信頼の重要性を学ぶことができた。
- ・成人看護慢性期領域では、2つのサテライト病院とA病院で、それぞれ6人の学生が実習した。サテライト病院では、置賜地方内の医療の連携および高齢者の継続的なりハビリや医療処置を必要とする高齢者のケアや看取り等について、他職種との合同カンファレンスを通して学ぶことができた。
- ・A病院での実習では病院内の多くの職種が実習に協力した。人工透析を受けている患者が地域で生活する中でセルフケア能力を高めるために、患者会等の組織や地域資源の活用方法、外来看護の役割、関連施設と連携、地域医療の課題解決に向けた看護師の役割を学ぶことができた。

【実施上のポイント】

- ・現行カリキュラムの実習で、地元の医療福祉における看護を強化した実習ができるフィールドを確保する。
- ・実習指導経験の少ない小規模病院等で行う実習としては、看護学の学びを深めている4年生が少人数で行う総合（統合）看護学実習等が向いている。1年次の基礎看護学実習での展開が可能かどうかは、科目担当教員と十分に協議する。
- ・地元の医療福祉の看護を強化した実習については、シラバスや実習要項の実習の目的や目標の一部に、その旨を明記し、学生がねらいを理解できるようにする。
- ・あらかじめ、教員が実習先の小規模病院等の状況を把握し、実習内容の事前調整を十分に行う。
- ・実習中、教員がフィールドを離れる場合でも、小規模病院等の実習指導者がすぐに教員と連絡を取れるシステムを整える。大学から遠隔地にある小規模病院等の場合、ICT活用による連絡について考慮する。
- ・実習における学生の学びを小規模病院等にフィードバックする。